

縄文人の土木工事—その知恵と工夫に学ぶ—

Public Works of People in Jomon Period

岡 田 康 博 (おかた やすひろ)

青森県教育庁 文化財保護課長

1. はじめに

約13 000年前、最終氷期が終わり、縄文時代が始まった。急激な温暖化は、針葉樹の森をドングリやクルミなど豊富な食料が実る落葉広葉樹の森に変えた。多くの雨水によって運ばれた養分に富んだ土砂は河口や海岸部に堆積し、豊富な魚介が生息できる環境をもたらした。その後、灌漑による稲作を伴う弥生文化が列島に広がるまでの間、約1 万年間、狩猟、採集、漁労を主とした生業が続き、この時代の文化を縄文文化と呼ぶ。

定住化が進むとともに、生活の拠点であるムラが出現し、ムラの中には住居や巨木を使った大型建物やまつりの場所である盛土遺構などの施設が作られ、やがて地域を代表するような拠点的なムラも現れた。大規模な記念物である環状列石（ストーン・サークル）も登場した。丸木舟を操り、遠方との交流や交易も行われ、ヒスイやアスファルト、黒曜石が運ばれた。まつりに使われる土偶もたくさん作られ、身を飾る装身具類も発達した。

縄文文化の特徴的な要素として土器がある。土をこねて思いどおりに形を作り、火熱による化学変化により安定した容器を手に入れることによって、「煮る」や「貯蔵」も容易となった。「煮る」ことによって堅いものが柔らかく、植物のアク抜き処理も可能となり、自然の恵みをより広く利用できるようになった。煮沸することによって衛生環境も向上した。土器の出現は食生活に安定をもたらした。それまでとは生活様式が大きく変わった。現在のところ、土器の起源地については日本列島を含む、北東アジアが有力とされている。日本では青森県大平山元I遺跡などから最古の土器が出土している。

2. 多様な土木工事

縄文人は必要に応じて土地を大きく改変する土木工事を行っていたことが各地の発掘調査によって明らかとなった。青森県の特別史跡三内丸山遺跡や岩手県の史跡御所野遺跡などではムラを作るために盛土や切土をして平坦地を作出している。青森県の史跡小牧野遺跡では斜面上側を切り崩し、下側に盛土して平坦地を作り、そこに2 700個もの礫を円形に配置している。また前述の三内

丸山遺跡では地面を掘削して長さ400 m以上の道路が造られているほか、秋田県の漆下遺跡ではムラから下の河川まで続く斜面に石積みの階段が構築されている。また、関東地方では湿地に丸太を渡した木道も確認されている。谷や湧水の近くには足場となる扁平な礫が設置されたり、貯水のための水槽や堅果類のアク抜き処理のための水場遺構や水路なども作られている。縄文時代に一般的な堅穴住居は地面を掘削して作られるし、直径1 mもの巨木を柱とする大型掘立柱建物の柱穴も同様である。谷地形の斜面などには軟弱地盤を補強するための木杭が敷設されている。

3. ま と め

このような土木工事は定住と密接な関係があるものと考えられる。定住の確立とともに生活を営む上での利便性の向上を試み、特に土地に対して積極的な関与を行っている。それは自然の人工化、社会化とも呼ばれている。当然ながらこのような行為が可能であった技術や組織の存在がある。縄文社会は想像以上に発達、成熟していた。

一方では急激な改変を選択しないなど変わらない自然との共生の姿勢も見られる。特に無理や無駄のない資源利用や徹底した再利用は縄文社会に普遍的に見られる。

施工のみにとどまらず適切に日常的な維持管理を実施しており、集団や地域社会の作業として日々の生活の中に織り込まれていた。そうすることによって人と人や集団と集団の結びつきや連帯を確認し、強化するとともに基本的な技術の伝承の機会ともなった。

程度や質の違いはあってもより快適な暮らしを求める気持ちは昔も今も変わらない。生活の拠点であるムラは人々が安全に暮らせる空間であるとともに精神的にも安定する空間である。さらにムラ周辺の空間も工事などの人間の活動が展開されることによってより安心、安全が保たれる空間を拡大保有することになる。しかし、そのような行為は無制限、無秩序に行われるものではなく、自然の一員としての自覚のある縄文人は「共生」の範囲を大きく踏み出すことはなかった。だから縄文文化は1 万年間という悠久の時間、継続したのである。

(原稿受理 2012.8.1)